

## サタンよ退け

### 「マタイ福音書4章1 - 11節」

この部分はイエスが、その公生涯をはじめるとに当たって、サタンの横行するこの世の中であって、我々人間が如何に正しく生きなければならないかを、身をもって示して下さった所と考えられる。ここにはサタンとイエスとの間に交わされた三つの問答が書いてある。聖書はすべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である（・テモテ3 - 16）とあるように、この三つの問答から次のような事が示されるのではなからうか。まず第一は、我々が生活するための食物の事について書いてある。我々はこの平和時において、幸、衣食住について困ることはない。食料も不足する事はないし、衣についても欲を言わなければ、十分威厳を保つに足る衣服が与えられており、又住にしても狭いと言っても我が家が与えられている。サタンはこれについて、我々に不満の気持ちを起こさせようと常に我々をそそのかし誘惑しようとしていることがわかる。イエスはこれに対して明解に答えられた。「人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言葉で生きるものである。」これは全く驚くべき言葉ではなからうか。我々の目には兎角生活のためには物質的なもののみが必要であるかのように思われる。しかし、生活に必要なものは実はそれだけではなく、それではまだ必要なものの半分しかないのである。残りの半分は何であろうか。それは物質だけではどうしても満たされないもの、精神的なかと云おうか、心のゆとりと云おうか、我々の心をあたたかく包んでくれるものと言おうか、もっと霊的なものか、それが神の口から出る一つ一つの言葉の中にある、と言われるのである。み言葉こそ日々のかってと言われる所以であろう。第二の問答は与えられた権威に関する事である。我々公の職につかえる者には、その立場立場に応じて権威が与えられている。そして一人一人がこの与えられた権威を正しく行使することによって組織として強力な力を発揮することが出来る。サタンは之に対して何と言っているのであろうか。「若しあなたに本当にその権威があるのなら、それを今行使してみてもどうか」というのである。過ぐる大戦には多くの人々が海外に出ていったが、その或る者はサタンの誘惑に負けて、その与えられた権威を不法に使ってしまった。そして誤った権力の使用によって、また統制のとれないまま勝手に権威を濫用したため、その結果はサタンの思いがそのまま猛威を振るうこととなった。そのための戦の傷跡は二十数年たった今も尚東洋の各地に残っているのである。イエスは言われた。「主なるあなたの神を試してはならない。」聖書にあるように（ルカ12 - 55）恐るべき者がだれか、からだを殺しても、そのあとでそれ以上にできない者どもを恐れるな、恐るべきは主なる神のみである。第三は繁栄についてである。サタンは言った。「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう。」この世のすべての栄華をくれるというのである。ああ何という誘惑であろう。ここで人生の目的が二つに分れる。サタンの奴隷となって栄華を求めるか。或いは目的を他のもっと有意義なものに求めるか。サタンが果たして言う通りにしてくれるかどうかは明かではないが、少なくとも約束はしているのである。あなたの人生の目的は何でしょうか。イエスは彼に言われた。「主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ」そこに永遠の神の国が約束されるのである。そして幸か不幸か我々は栄華にはあまり縁がなさそうな仕事に従事しているのである。自衛官とは我々キリスト者には全く適合した職ではなからうか。サタンよ退け。

## 武士道・キリスト者と自衛官(その1) 矢田部 稔

### 1. 触らぬ神にたたりなし

現代日本人の精神的特徴の一つは、無宗教、宗教に対する無関心であり、これは内外の識者から指摘されていることである。特にキリスト者に関しては全く何も御存知ない方が少なくない。キリスト教会が大きく分けて新旧の二流に分かれているという程度の事は、日本の国政にたとえて言えば国会が衆議院と参議院の二つから成るといった程度のことと言えよう。自衛隊における教育は、広汎多岐にわたって行われ、部外の人々がたまたまその片鱗を知った時、「自衛隊ではそんなことまで教育するのですか」と驚嘆するくらい、人間生活のさまざまな面にまで及んでいる。だが、しかもその中でポツカリと大穴をあけているように思われる点がある。そもそも宗教・信仰というものは憲法第二十条を引用するまでもなく、国家がこれを信ぜよと命ずべきものではなく、個人の責任においてなすべきものであって、聖書にも「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい」とあるとおり、国家の関与、指導すべき面と、国家の指導・統制を越えた面とが人間生活にはあって、前述したように自衛隊の教育の中に大きな穴のあることは、むしろ当然であろう。

国家として必要な統制、指導をすべきにもかかわらず、それが出来ないなら

は、弱い勝手気ままな社会、穴だらけの国家ということであろう。我々はそのような弱い国家ではなく、強い正しい国家でありたい。しかし一方国家が全能の神の座に昇り、人間生活のあらゆる面について意の如くに統制出来、またしようとするのであれば、それは全体主義国家であり、悪魔的な国家である。徳川時代の長いキリスト教禁教策の時代を通して養われた「触らぬ神に祟りなし」という習性は、近代日本にとっても引き継がれ、おまけにハイカラな近代インテリとは脱宗教の人種を指すのだとの皮相な考えを輸入したり、また国家と教会の衝突という事態や、政治と直結した宗教の出現などにも影響されて、その定着度を深め、ともに角にも、その穴の近くにいきさえしなければ祟りなしとして、穴のあることを殊更に見ようもしない者、ましてその穴の中を探して研究してみようなどとは思ってもみない者、無信仰者、無宗教者を作っているのが現状ではなからうか。まことにこの穴に至る門は狭いのである。

## 2. ヤソ宗教は外国の邪教

仏教はインドで生まれたものだから日本のものではなく、外国の宗教だといっても通用しないように、キリスト教は外国から伝わったものだから外国のものだと言うことは正しくない。しかし教会の牧師が日本人であるかどうか心配される方もなくはないので、明治時代の先覚者のとった態度をもう一度見直してみることも無駄ではあるまい。明治時代は長い鎖国の幕を上げて国際社会の中に飛び込んだ時代であり、日本民族としての自覚意識は極めて高揚され、日本の古代が研究され、日本精神が盛んに求められた時代であり、また特に日清、日露の戦勝により民族的自信が著しく高められた時代でもあって、和魂洋才のスローガンのもとに外国の物質文明は取り入れても大和魂以外の精神を輸入することは相成らぬとばかり、外国からの精神文明に対し極度の反発と警戒をもった時代であったので、当時の牧師、伝道者達にとって、「キリスト教は外国のもの」という攻撃は大いに痛かったらしい。その時、内村鑑三は「代表的日本人」を著して、代表的日本人と考えられる、西郷隆盛、上杉鷹山、二宮尊徳、中江藤樹、日蓮上人の五名をあげ、彼らは教義は知らず、福音にあずからずとも、あたかもキリスト教に触れたかのような人物であることを論証している。(桜美林大学長 清水安三氏によると藤樹は隠れキリシタンであり、また隆盛の学んだ陽明学はキリスト教の影響を受けている。)

- 次号につづく -

## 防大聖研における話し合いから

(キリスト者自衛官としての問題の提起)

キリスト者自衛官として常に問題になることは、万国共通なことであるが平和と戦いと関連についてである。聖書には「殺すなかれ」「自分を迫害するもののために祈れ」と書いてあり、これはどうしても避けることが出来ない。戦争論では敵がい心が必要であり、しかも中途半端なものえはなく、最大限の敵がい心が高揚されなければならない。戦では勝利を得るためには撃破という生やさしいものではなく、せん滅という考え方で行かななければならない。軍事学ではこれが要求される。しかるに教会とか、世に言うクリスチャン一般では無抵抗主義とか絶対平和とか、中には敵が来たら殉教するなどと言う立場の先生もいる。聖書は果たしてこのようなことを言っているのだろうかという考え方に先ずつき当たる。勿論聖書はその読む人に向かってそれぞれの人の立場に対して与えられるものが異なるということ考えられるが、それはどういうものであろうか。しかし聖書には別の箇所には、ヨシュアやダビデのように神の名において戦いに参加していることもあり、又カペナウムの百卒長のように軍人として立派に行動している例もあるのこれらの事は両立するだろうという安心感はあるが、しかも尚「殺すなかれ」という言葉はひっかかる。

米軍の例を取れば戦争裁判の記事でもkillの他にdestroyとかdefeatとかの言葉を用いているが、それでもこの点を避けることは出来ず、未だに完全な解決はない。

又、米軍のある士官(Wilson中尉)のあかしによれば第一に義であり、次に平和と言っている。聖書の平和は義の結果としての平和であり、義であり得ないときには平和はあり得ないとしている。キリスト者としては神の義を求めることが第一であり、それによって平和が与えられるわけで、主は正しい者には平和を賜るが、不義な者には賜らない。そしてイエスは「心をさわがせるな。おじけるな」とはげましの言葉を与えている。(ヨハネ14-27)「殺すな」という事は心の動機であることも大きい。にくしみとか、うらみとか肉体的には殺していないが精神的には殺しているという場合がある。そしてどうしても殺さなければならぬときには神の義とされる戦いにおいてのみこれが許される。実際には地上にある政府の命令で戦場に行く。これをやらなければ偽善になるのではないか。この点に本当の信仰が必要なのでなからうか。以上は問題提起であり、自衛官としては一度は解決しておかなければならない問題であろう。読者よろしくご判断の上、解凍をよせられるようお願いする。

「元陸軍大佐 牧師 岩井 恭三」

元軍人で、終戦後牧師になった人の名は以外に多い。しかし、旧軍隊内でキリスト者として立派な証をしながら第一の転職を全うし、且つ終戦後第二の転職として牧師になった人の一人が岩井恭三先生であろう。先生は惜しくも昭和45年に昇天され、今はこの世でお会いすることは出来ないが最近先生を偲んで、近親、知人の思い出を集めた文集「真帆を上げて」が出来たので、それからの一文を通して先生を紹介しよう。筆者バックストン師は現在英国OCUの指導者であり、一昨年来日の際防衛大学校にもおいでになり、我々コルネリオ会員とも主にある交わりの時をもったことがある。尚有名な日本伝道隊を設立したバックストン師は彼の父君である。

「ゴッドフレ・バックストン」

主キリストを信じた岩井先生

1967年、岩井牧師夫妻が渡米された。それは息子の満さんが、聖書同盟の宣教師としてインドネシアへ派遣される前、その訓練期間が終わろうとしているときだった。

私どもは、岩井牧師のメッセージと、目がほとんど見えない岩井夫人の聖徒らしさに、深く感動した。これが私と彼らとの出会いであり、私はその時以来、彼等を愛するようになった。

岩井牧師はかつての日本陸軍に属しており、大佐にまで昇進された。英国将校たちの集まりで、彼は自分が少尉の時、主イエス・キリストを信じ、自分の罪からの救い主として受け入れるまでは、異教徒のようであったと語った。大きな喜びが洪水のように彼の生活を満たし、憲兵が他人に証しするのを止めろと命令したのに止めようとはせず、証しを続けた。それで憲兵は彼を追放するようにと上官に勧告したが、上官は、彼の軍務態度を調査した後で追放するのを拒否した。

感謝の祈りと必要の満たし

岩井先生はその信仰生活の初めに、神が自分の個人的必要を満たすことが出来るお方であることを学んだ。砲工学校に在学中、ある工場見学のために旅費が必要であった。日曜日の礼拝の主題は「感謝をもって祈りと願いとをささげること」(ピリピ406)であった。

しかし与えられる前にどうして感謝できるだろうか。彼は自問した。その時感謝は信仰のあらわれであると教えられた。「何事でも神のみ心になう願いをするなら、神はその願いをきいて下さるといふこと。これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願うことを神が聞いて下さることを知れば、神に願ったことはすでにならされたと知るので。」(第1ヨハネ5・14)

なおいぶかりながら家に帰り、そのお金を祈り求めたが、次のようにつけ加えた。「でも主よ、あなたは私に感謝をもって祈るべきだとおっしゃいました。ですからわたしは感謝してお願いします。」この半信半疑の祈りに答えて主は、そのお金の半分を送って下さった。そこで彼はまた祈った。「主よ、こんどはあなたが残りのお金を必ず与えて下さることを信じて感謝します。」と。翌日曜日の朝、彼はいっさいの必要を満たされてその工場へ出かけていった。この事を通して彼は、必要なお金が与えられたということ以上のものを神から受けた。それは神がその御約束に従って、お金を賜っただけでなく、人智をはるかに越えた神の平安を賜って、その次の聖句(ピリピ4・7)をも満たされたからである。彼は、神が忠実な方であることを確信できたし、この確信は戦時中も、平和の時も全く当惑してしまうような状況下でも、一生涯彼から去ることがなかった。

敵の心の中にもたらされた平安

北支で、占領区域の鉄道を保持したり修復したりする責任に当たっていたときのこと、重要な工場を占領した。その時工場の労働者たちが捕らわれの身であるため恐怖におののいていることを知った彼は、キリスト者として、何とかこの恐怖から救い出したいと感じた。そこで彼らを一カ所に呼び集めて、「私はクリスチャンである。またあなたがたの生命は保証する」と告げた。それから皆を釈放した。このことは勿論、同僚の将校たちの反感を買ったが、彼は労働者たちに「次の日に工場に働きにくるように」と求めた。翌日十人が帰って来、翌々日には捕虜とならなかつた者たちも含めてほとんど全ての労働者たちが帰って来た。彼らは、岩井中佐やその部下たちが食糧の制限を受けていたのに、労働者と家族には十分な食物があり、またその村の食糧が無事に供給されるように保護した。

敵の間での礼拝と後の交わり

フィリピンでは彼はその国の敵ではあったが、いつも地方教会に出席した。土着民の間に入って行くので生命の危険を犯しながら、フィリピン人牧師と彼は、お互いの国家と、その場所で戦っていたが、深い交わりを持った。戦後彼の息子がその牧師を訪問した。その牧師は、岩井大佐をかつて自分があった中での最も偉大な友であると語った。彼の写真がその牧師の書齋にかかっていた。



1945年、彼は、入旨をはるかに越えた神の平安、が自分の心を満たしてあり、敗戦しても彼と部下のキリスト者は、連合軍のキリスト者将校や部下たちと真の霊的交わりを持てることを見出した。

彼は主イエスは我々を大きく変えうる方であり、憎しみの代わりに交わりの種をまき、又軍務をよく果たされる方である。だからキリスト者として指揮をとることは、軍隊の義務を遂行するときにもどんなに有益であったかということ語ってくれた

### クリスチャン・ホームの影響

岩井家では五人の息子と一人の娘がいる。彼らは皆主イエスキリストに積極的に仕えている。クリスチャンが家庭において、子供たちの前に生き、聖書の真理を子供に教えることは、現在の世の中にとって、大変重要である。なぜならそれによって子供たちも、また他の人も、神の救いが、家庭や将来の仕事や戦争においても何かを生み出していくかを理解できるようになるから。そしてまた救い主から与えられる祝福を認め、子供たちが主に信頼することができやすくなるからである。岩井大佐は日本のキリスト者将校連盟の方のお父さんを通して信仰へと導かれた。日本の人々が聖霊に満たされ、岩井大佐がかつてそうであったように、神の兄弟姉妹となりうる他の人々をイエスキリストに導きうるように祈る。

## 通 信

北海道地区（島松、千歳、札幌）の科尔ネリオ会で6月11日すずらん狩を行った由、すずらんを航空便で送って頂きました。有り難うございました。主にある交わりを感謝すると共に益々御発展を祈ります。

滋賀県今津の日基今津教会の浅見文博牧師から次のようなお便りがありました。主の聖名を讃えます。科尔ネリオ会のこと小森邦治兄から伺いました。神の国建設のため共に励みましょう。今津には自衛隊の駐屯地があり、教会の幼稚園にも約半数（35）の幼児が隊員のお子さんです。こうした子供たちの家庭が神の守りのうちにおられるよう祈っております。四年前には益田泉女史（シベリヤ女囚）をつれて、隊内で話をさせていただきました。では会員のみなさまのご健闘を祈ります。

千葉愛爾牧師（日基久里浜教会）から  
タイプ版になって大変読みやすくなりました。短くてもよいから多くの人の一筆が頂ければよいですね。．．．．．

相原正勝牧師（沼津市香貴教会名誉牧師）から  
皆様の御文章誠に有益に、又面白く拝見しました。軍人の皆様は、やはり理屈よりも実際の体験を語っておられるので、心を動かされるものがあります。主イエスがローマの百卒長の真実、率直な態度と言葉に動かされたことを思いおこしました。たとえ軍人が必要のない世界になっても、いつわりのない、真実の軍人精神は人類に必要な「地の塩」として本当に必要なものと信じます。昨年末の飛行機の衝突事故や、シビルコントロールの問題等、重大なことが次々に起こっており私共も自衛隊の健全な在り方の為に祈っております。自衛隊が平和を守る隊として正しくその存在価値が認められることを祈っております。又お目にかかる機会をめぐまれますよう祈ります。皆様によろしく願います。

昇任・転勤・住所変更等の場合はお知らせ下さい。

科尔ネリオ誌原稿募集。論説、あかし、近況、通信何でも結構です。

科尔ネリオ会事務局

横須賀市走水一丁目 防衛大学校

応用物理学教室 射理研内